

# 早期胃癌に対する 内視鏡治療適応の 現状と展望

## KEY WORDS

- 早期胃癌
- 内視鏡切除
- 内視鏡的粘膜下層剥離術 (ESD)
- 適応拡大

Current status and future perspective of ESD indication for early gastric cancer.

Kohei Takizawa (医長)  
Hiroyuki Ono (部長)

静岡県立静岡がんセンター内視鏡科 滝沢 耕平, 小野 裕之

## はじめに

早期胃癌に対する内視鏡治療は2000年代に入り内視鏡的粘膜下層剥離術 (endoscopic submucosal dissection ; ESD)の登場により劇的に変化した。2006年には保険診療として承認され、当初は限られたハイボリュームセンターだけで行われていたESDが、現在では全国に広く普及している。手技の安定化に伴い、適応の拡大も検討されるようになり、従来の適応を超える病変に対してもリンパ節転移リスクのきわめて低い病変に対しては適応拡大病変として試験的な治療が行われていたが、ようやく前向き臨床試験により長期予後に関するエビデンスも証明され、標準治療として認められる日がやってきた。本稿では早期胃癌に対するESD適応の現状と展望について解説する。

## I. 早期胃癌に対する ESDの短期成績

早期胃癌に対するESDの短期成績については、これまでさまざまな施設から多くの報告がある。厚生労働科学研究費補助金(がん臨床研究事業)「Web登録システムを用いた早期胃癌内視鏡切除症例の前向きコホート研究」<sup>1)</sup>という大規模研究が行われ、筆者らはその短期成績を2016年5月の米国消化器病週間(Digestive Disease Week ; DDW)で報告した<sup>2)</sup>。対象は2010年から2012年までに全国41施設で内視鏡切除が施行された早期胃癌(もしくは早期胃癌疑い)10,821病変(うちESD 10,755病変)である。結果のサマリーを表1に示す。比較的症例数の多い施設が中心ではあるが、日本全国を対象とし、10,000例以上のESD症例を含む大規模な前向きコホート試験であり、日本における胃ESDの現状を示す数字